

研究代表者 所属・職：スポーツ科学部・教授

氏 名：藤田 紀昭

研究課題名：大学を拠点とした障害者スポーツの普及、選手育成のあり方に関する研究

取り組み状況（1年間）

本研究では大学を拠点とした障害者スポーツの普及・選手育成のあり方を明らかにするとともに、大学が所在する自治体や地域住民への影響を明らかにすることが目的である。そのための取り組みとして 2017 年度は以下のことを実施した。

・**体力トレーニング領域の取り組み**：障害者スポーツ選手の体力測定を実施するため、本学の学生、卒業生、および付属高校生を対象に被検者を募集した。また、体力測定およびトレーニング指導を行うための内外の事例を調査した。研究のための倫理審査申請を行い、受理後パイロット測定を障害者スポーツ選手 5 名に対し行った。

・**バイオメカニクス領域の取り組み**：陸上競技（やり投げ、100m）、車椅子バスケットに取り組む学生に対して 2 次元解析を行った。さらにダートフィッシュシステムを用いた動作分析も併せて行った。

・**心理学領域の取り組み**：体力トレーニング領域の測定に参加した被検者 5 名を対象に、障害者スポーツ選手の心理特性に関する各種調査を実施した。

・**マネジメント領域の取り組み**：障害者スポーツ支援を行っている先進的な大学として英国のラフバラ大学およびウースター大学の視察を行った。また今後の研究のため美浜町教育委員会等関係部局との関係作りを行った。

研究成果の内容

1) プロジェクト目標の達成状況・成果内容

・**体力トレーニング領域**：これまで実施された国内外の障害者スポーツ選手の体力測定事例を調査し、体力測定の項目や測定プロトコルについて検討した。それらに基づいて、水泳 2 名、車椅子バスケット 1 名、陸上 2 名について、パイロット測定を

実施した。その結果、新たなプロトコルの設定の必要性や測定方法の変更といった障害者スポーツ選手のための体力測定のシステム構築のための資料を一部蓄積できた。

・**バイオメカニクス領域**：障害のある学生がどのように技術を習得し、競技力向上をしていくかを明確にするには十分なデータを収集できなかったが、インクルーシブ教育の一環として同じクラブ内に障害学生がいることへの一般学生の教育的効果は得られた。

・**心理学領域**：心理的競技能力、状態・特性不安、競技意欲に関する質問紙調査、及び自律神経活動の測定など、障害者スポーツ選手の心理特性を包括的に理解するための基礎資料収集を開始することができた。

・**マネジメント領域**：英国のラフバラ大学およびウースター大学の視察を行った結果、大学を拠点として障害者スポーツを支援するための学生に対する授業の内容、方法、情報発信の方法、資金の調達に関して参考となる事例を得ることができた。具体的には地域と連携した講義（実習の在り方）、学外機関からの資金調達の重要性などである。また今後の研究のため美浜町教育委員会等関係部局との関係作りを行い、関係部局とのパイプを作ることができた。

2) 優れた成果があがった点

・**体力トレーニング領域**：体力測定の測定項目は、障害の程度によりできることとできないことを把握し、また限界まで追い込むための方法について検討したうえで決定することが必要であることを確認した。しかし、有酸素能力の測定では、車椅子を使用するプロトコルについて、一定の方向性が示された。

・**バイオメカニクス領域**：上肢に障害のある学生

のやり投げ動作は健常学生の投擲動作（投擲側の逆上肢の使い方）と違いがあることがわかった。

・**心理学領域**：障害者スポーツ選手の心理特性を把握するにあたり、調査で使用した質問紙の有用性を確認することができた。今後の縦断かつ横断研究への方向性を概ね示すことができた。

・**マネジメント領域**：大学を拠点とした障害者スポーツ支援の在り方の実例について知ることができ、今後の拠点化に向けたあり方を描けた。

3) 研究期間終了後の今後の展望

今後は体力トレーニング領域、バイオメカニクス領域、心理学領域における事例数を増加させ、障害者スポーツ強化のための基礎資料を蓄積するとともに、選手の継続的な支援を行いその変化を時系列的に明らかにする。また領域が連携し、総合的な支援システムの構築を目指す。マネジメント領域に関しては町の関連部局とのヒアリングを行うとともに町民を対象とした調査を実施することで大学が障害者スポーツ支援の拠点となることの影響、合わせてパラリンピックのキャンプ地となることの影響について調査する。